『主イエスの言葉を想う人』ヨハネ14:21-24

14:21 わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう」。
14:22 イスカリオテでない方のユダがイエスに言った、「主よ、あなたご自身をわたしたちにあらわそうとして、世にはあらわそうとされないのはなぜですか」。
14:23 イエスは彼に答えて言われた、「もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう。
14:24 わたしを愛さない者はわたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉は、わたしの言葉ではなく、わたしをつかわされた父の言葉である。

●序論
ある礼拝の中で使徒行伝最初の殉教者ステパノのところを通してお話しくださいました。
　使徒7:56-58 そこで、彼は「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える」と言った。人々は大声で叫びながら、耳をおおい、ステパノを目がけて、いっせいに殺到し、彼を市外に引き出して、石で打った。
神さまが沈黙しているかのように見えます。けれども、そのただ中で、「ステパノは神の右にイエスさまが見える」という体験をしたのです。
そうして、石で打たれる中、最後に彼が残した言葉があります。
　7:60 そして、ひざまずいて、大声で叫んだ、「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい」。こう言って、彼は眠りについた。
ステパノは聖霊に満たされたからこそ、その神の沈黙にも見えるような苦難の現場で、神の右に坐するイエスさまが見えたこと。
　わたしたちもどんなことがあっても、そこで聖霊に満たされているならば、そこで主を見ることができる、主が共にいてくださることを経験できる…

不思議なありさま。死という敗北に見える現実にありながらも勝利を得ている。
聖書は、あのペンテコステの日のペテロを通して語ります。
　使徒2:36-37 だから、イスラエルの全家は、この事をしかと知っておくがよい。あなたがたが十字架につけたこのイエスを、神は、主またキリストとしてお立てになったのである」。
　　人々はこれを聞いて、強く心を刺され、ペテロやほかの使徒たちに、「兄弟たちよ、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と言った。

あのステパノが「イエスを見た」という経験は、わたしたちがこれまで読んできたヨハネの福音書にも示されてきたものだと気づきます。
　14:20 その日には、わたしはわたしの父におり、あなたがたはわたしにおり、また、わたしがあなたがたにおることが、わかるであろう。

さらにはこうあります。
14:21 …わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう」。

だからこそ、先週の信仰の言葉は、わたしたちに生きているとわかるのです。
14:18 わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る。
これがペンテコステの経験、聖霊がわたしたちに臨んだ時、この世にあって、「いろいろあるけれども」という中でも、主を見ることができる経験につながります。

●本論
Ⅰ．ご自身をあらわすイエスさま
14:22 イスカリオテでない方のユダがイエスに言った、「主よ、あなたご自身をわたしたちにあらわそうとして、世にはあらわそうとされないのはなぜですか」。
先週の礼拝の中でもお話したことですが、イエスさまは繰り返し、
聖霊が内に住まわれる経験を、「この世は見ることはできないが、あなたがたは見ることができる」という風にお語り下さったことを紹介しました。
そしてポイントは、聖霊なる神さまが、助け主として、弁護者として、わたしたちを守る方として、わたしたちの内に、共ににいてくださるとお話ししたのです。
さらにこれは「神秘的な経験」であり祝福だとお話ししました。
人が、人の力で持つことのできる経験ではなく、イエスさまを信じ、愛することで受ける、神さまからの祝福であるということを覚えていてください。

ですから、22節の「あなたご自身をわたしたちにあらわそうとして、世にはあらわそうとされないのはなぜですか」との問いに対する答えはこうでした。
14:23 イエスは彼に答えて言われた、「もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう。

ただ一つの条件、「イエスさまを愛す人に、ご自身をあらわし、その人のうちに住まわれる」という神秘的な経験をすることができるということです。
それはすなわち、変身でまったく違う人になってしまうのではありません。
イエスさまを愛することで結ばれたその新しい関係によって、わたしたちは新しい経験へと入れていただくことができているのです。その証を聖書は語ります。
2コリント5:17 だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。

Ⅱ．愛する経験の中へ
14:23 イエスは彼に答えて言われた、「もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。…

昨日のセミナー「聖書的結婚観と今どきの結婚観」
午後は、異性を理解するということの中で、こんな言葉を聞きました。
「御心だから結婚する」「御心の結婚だからうまくいく…」という人がいるけれども、それでうまくいくことは難しい。
生い立ちも、これまでの経験も何かも違う、男性と女性というお互いの違いを理解すること、受け入れ、そして工夫することの大切さをお話しくださいました。
神さまがわたしたちに与えてくださる相手にも足りなさや不十分さもある。けれども、そのすべてを覆う「互いに愛し合う」ことので、お互いの違いに気づかされ、思そこで私たちの結びつきは成長する、そのことを受け入れることでのです。

改めて、イエスさまを愛するというとき、イエスさまとの愛の関係の中に入るということはどういうことでしょうか。
イエスさまは、わたしたちのすべてを知っていてくださり、忍耐をもってわたしたちの歩みに共にいてくださり、その祈りにも耳を傾けてくださいます。

一方でわたしたちはどうでしょうか？　イエスさまに自分のイメージを押し付けて、逆コントロールしようとしてはいないか、ということが問われます。
いわく自分の主張が強い、いや強すぎることで、その主張が、神をコントロールし、周囲を支配するというものになってはいないか、そう問われることは大切です。
「わたしはイエスさまを愛している」という強い主張のイエスさまへの押しつけは、言葉は違えど、当時のペテロを筆頭とする弟子たちの中にも強くありました。
…だから、まだ御言葉が聞こえない。わからないでいたという事実もあって、彼らはイエスさまの十字架に至る受難の現場で逃げ出してしまったのです。
覚えてほしいこと。それは、そんな弟子たちのありさまのすべてをイエスさまはご存じでいてくださり、彼らをとりなし、また今はわからないが、今にわかるようになる…とも語り、導いてくださっていたということです。

だから三つ目の事柄
Ⅲ．イエスさまの言葉を想う人になる
14:23 イエスは彼に答えて言われた、「もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう。
14:24 わたしを愛さない者はわたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉は、わたしの言葉ではなく、わたしをつかわされた父の言葉である。

「思う」と「想う」という言葉の違いについて
「思う」は、主に「考えや意見を持つこと」を表現する。たとえば、「私は彼が正しいと思う」という文では、話し手が彼の行動や意見が正しいと”考えている”ことを示している。
一方、「想う」の方は、「心の中で感じること」や、「感情や気持ちを持つこと」

で、「彼女を想う」という時には、彼女に対して特別な感情を持っている…ことを示す”経験”にもつながる言葉です。

わたしは今日、主イエスの言葉を「想う」としました。そういうとき、それはただ聞いて理解し、こんな風に考えているんだな…と”思う・考える”ことを超えて、イエスさまのお気持ちを「想う」「想像する」そしてその気持ちを受け取る経験をする人です。

そしてそのことで本当の意味で、応答として「わたしを愛する人」につながるのだと。イエスさまを愛するということ、そうしてイエスさまのお言葉を聞くことには、イエスさまのお気持ちを「想う心」が動くのです。
その想う心が、わたしとイエスさまとの間の当然の違いを乗り越えて、そのお気持ちを想って”愛する”という言葉につながる、のだということです。
そうやってイエスさまの言葉を”想う”とき、わたしたちはそこにただ従っていればいいという文字面ではなく、イエスさまの愛、イエスさまのお気持ちに心を寄せて応答することができる…ようになる、そう信じるのです。
そしてこの”想う”ことこそ、聖霊のお働きを得て初めてできることだと信じます。

さいごに）
この世が失った最も大きなものは、神さまの悲しみを”想う”ことがない、ということでしょう。　わたしたちが神さまに背を向けたまま滅びゆくありさまを、心から悲しむお方、それが聖書が示す神さまなのです。
ですから聖書は、神のわたしたちに向けた愛を語ります。
ヨハネ3:16 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。
それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

最初に紹介した、殉教者ステパノの最期の言葉は、聖霊に満たされた言葉です。
「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい」。
彼はイエスさまの証を受け入れない民の中で、イエスさまを見つめながら叫びました。

今日、わたしたちもまたこの世にあって、イエスさまを想う人として召されています。その中でわたしたちは御言葉を聞いていることを、御言葉を通して父なる神の思いを想う者とされていることを、覚えましょう。　イエスさまはこういっているからです。
14:24 …あなたがたが聞いている言葉は、わたしの言葉ではなく、わたしをつかわされた父の言葉である。